

『人生地理学』の先見性

村尾行一

本日は、創価学会初代会長牧口常三郎の最初の大著『人生地理学』が、当時の人は思いもしなかった、それどころか、ものによっては現在の人も思いもしないでいる思想、発想、認識を展開していることについて、お話しいたします。

なお、この本は今からちょうど百年前に出版されたものですから、表現が今の人にはわかりにくいと思いますので、現代文に翻訳し、言葉を補って引用いたします。また、慣例として亡くなった人や外国人は敬称を略しますので、ご諒承下さい。

を明確にしています。だからこの本は、人間を主体とし、自然をその生活環境とするところの、「地人相関」論なのだと言換えることができます。

すると、私の頭にすぐ浮かぶものは、エコシステム、つまり生態系という概念です。日本でも近年、エコロジー、つまり生態学という言葉が一般に広く使われるようになっていますが、そのエコロジーの主要な研究対象がエコシステムです。

エコシステム＝生態系とは、「或る生物である主体と、その生物学的ならびに非生物的環境との相互作用システム」と言つてよいでしょう。そこで、「或る生物主体」を例えば森林としますと、「森林生態系」となります。同様に「或る生物主体」を人間としますと、それは「人間生態系」というものになり、まさに『人生地理学』の主題である「地人相関」そのものになります。

しかも牧口は、後で詳しく見ますように、人間は一人では生きられない、人と人との連帯のお蔭で生きていられるのだと考えていますから、この「人間」とは、個人としての人間ではなく、あくまでも「社会」

一 世界最初の社会生態学

まず最初に、『人生地理学』は世界初の社会生態学の書物であるということ述べます。

牧口が『人生地理学』で明らかにしようとしたものは、「地と人生との関係」、もう少し詳しく述べると、「地球の表面に分布する自然現象と、人類の生活現象との関係の系統的知識」⁽¹⁾です。その場合、自然現象と人類の生活現象のうち、どちらを主題にするかという⁽²⁾と、牧口は「人類の生活現象を主題にする」と、その立場

のことなのです。事実牧口は、この本の題名をいろいろ考えた時、「社会地理学」とした方が、題名が内容に合うので、かえって最も適当かもしれない⁽³⁾と言っています。だから『人生地理学』は、今風に題名をつけると、『社会生態学』ないし『社会生態系論』となりましよう。

私は「今風に」と申しましたが、生態学という学問分野も生態系という概念も、若いものです。ましてや人間生態学・社会生態学にいたっては、さらに新しいものです。

「生態学」は、ドイツの動物学者エルンスト・ヘッケル(Haeckel, E.H. 1834-1917)が一八六六年に造語したものです⁽⁴⁾が、二十年近く誰もこの新しい概念に気がつかなかった上に、そもそも当の本人であるヘッケル自身が、この概念のもつ意義を十分理解せず、生態学の発展になんら貢献しなかったとまで言われるほどです。さらに言う⁽⁴⁾と、ながら生物学界では、生態学なるものは科学ではなく、一種の思想・自然観であるという認識が有力だったと言われています。

これが、科学だと公式に認知されるようになったのは、一九一四〜五年、つまり大正三〜四年のこととしてよいでしょう。というのは、イギリス生態学会が一九一四年に（形式的には一九一三年）、次いでアメリカ生態学会が一九一五年に設立されたからです。やや余談ですが、当時生態学に最も強い関心をもったのは、私の専門分野でもある林学者、つまり森林の研究者でした。⁽⁵⁾そして、欧米のみならず日本でも、生態学は林学の基礎学であり、林業つまり森林を造り育て利用することは、生態学の応用であると考えられています。

「生態系」という概念の誕生はさらに遅く、イギリス生態学会の創設を主導したイギリス人植物生態学者、アーサー・タンズレー (Tansley, A.G., 1871-1955) が、一九三五年（昭和十年）に提唱しました。

と言っても、一九六〇年代以前には、専門家以外にとつて生態学は無縁のもので、今日のように生態学者が多数輩出し、それだけではなくエコロジーという言葉が社会全般に知られるようになり、何かにつけ「エコロジー、エコロジー」と、まるで流行語のようにな

才であるかがわかります。

二 人間は地球規模で連帯して生きている

次に、『人生地理学』が、人間は地球規模で連帯して生きているということを説いた、世界最初の書物であることを述べます。

牧口は、個人は他の人々と連帯してこそ生きていられると認識していました。この連帯関係が社会です。だから、個人と社会とは二而不二の関係にあるもの同士、観念的には分けられても、現実的には不可分のもの同士と認識していたのです。

個人と社会との関係についてのこうした認識は、後の一九三〇年（昭和五年）に第一巻が出版された、『創価教育学体系』で詳しく展開されます。そしてこの認識が、国家の欲望を個々の国民の意思や権利、さらには尊厳に対して圧倒的に優先させる国家主義、滅私奉公論、愛国心の押しつけ等に対する、牧口の痛烈な批判と死を賭した闘いの根底にあるのですが、牧口はこの認識を、早くも『人生地理学』において述べていま

ったのは、世界的には公害問題・環境問題、さらには資源問題が噴出した一九六〇年代以降のことであり、日本の場合は一九七〇年代からのことでしょう。

そして人間生態学ですが、名前こそ一九一四年までに知られていましたし、それに関する著作や『社会生態学』と題する著書が、一九三〇年代に出ていました。しかし実質は、アメリカ生態学会に人間生態学委員会が設置されたのは一九五五年（昭和三十年）ですし、しかもあつという間に、学界の人間生態学に対する関心も支援も衰えたというのです。⁽⁷⁾

そこで「社会生態学」である『人生地理学』です。これが最初に出版されたのは一九〇三年（明治三十六年）です。そして遅くとも、その前年の一九〇二年には原稿が完成していました。⁽⁸⁾牧口はそれ以前の北海道時代に、約二千枚という大部の原稿をこつこつと書きためていたのです。⁽⁹⁾年齢で言えば二十代の作品です。牧口が北海道から東京に移るのは一九〇一年、彼が三十歳の時です。今まで概略を申し上げたエコロジーの歴史と対比した時、牧口がいかに先見の明ある、早熟な天才です。

つまり、一見狭い生活圏の範囲内で暮らしているかに見える平凡な庶民と言えども、自国全体は勿論のこと、広く全世界の人々との連帯のお蔭で生きていると言うのです。しかも牧口は、このことを庶民の生活を題材にして、庶民に理解しやすく説いたのです。

元来私は荒浜（現在の新潟県柏崎市荒浜）という片田舎の貧乏人の生まれで、放浪生活を送って生涯の半分をいたずらに衣食を求めることに費やして、世の中のためにならん貢献していない者であるが、ところが、さて、この貧しく賤しい人間の日常身辺を見まわしてみると、全世界の人々からの無量の影響を受けていることに驚かざるをえない。瘦せた五尺の体にまとう服は、粗末なものではあるけれども南アメリカもしくはオーストラリア産の羊毛であつて、それを原料にイギリスの鉄と石炭を使ってイギリス人が造ってくれたもの。私が履く五寸の小さな短靴

も、不細工な品ではあるが、底皮はアメリカ合衆国のもの。それ以外の革はイギリスの植民地インドのもの。ここまで書いて筆を止め、頭を上げてふと見てみると、赤々としたランプの油がこう語りかけているようだ。「自分はロシア・コーカサスの山端のカスピ海の畔の油田から採れたもの。一万哩を越えてここまで運ばれて来たのです」と。燈光を調節して視力を補う眼鏡のレンズも、ドイツ人の精巧と熟練が想い起こされる。一庶民の寒夜の一瞬の生活が、多く考えることもなく、単に頭に浮かんだものだけでも、私の生活がこのように世界中の人々と関係していることがわかる。

今もし、これらが牧畜され、採掘され、収集され、製造され、運搬され、売買されて、ようやく私の元に辿りつくまでの人手と時間を想像する時、またこうした有形の物に警醒されて、さらに無形の影響に考えを及ぼす時、平素全然感じもせず考えもしないで過ごしてきた単調な

半生が実はこのように広大な空間と時間との絶大な影響の焦点として送られてきたことに気がつくといかに驚かざるをえない。私の子供は母乳が不足したので乳製品で代用しているのだが、日本製の物はしばしば粗悪だから、お医者さんに頼んで、ようやくスイス産の物を手に入れた。だからスイスのユラ地方の山麓の牧場で働く牧童に感謝しなければならない。また、視線を転じて、この子が着ている衣服を見ると、即座に黒い皮膚のインド人が炎天下に汗を流して作った綿花から出来た物であることが想い起こされる。このように、無教養の身分賤しい人間の子供といえども、その命は、生まれた瞬間から世界中の人々のお蔭にかかっているではないか。⁽¹⁰⁾

これが『人生地理学』の冒頭部分です（緒論一 地と人との関係の概観・吾人と世界）。世界中の人と人との連帯・共和、つまりは平和なしには、われわれ人間は生

きていられないことが、この牧口の実生活の匂いあふれる文章から、よくよく納得できるのです。そして、こうした視点から、連帯・平和の大事さをわからせるという発想は、当時は勿論のこと、今でもごくごくまれでしょう。国際的な人と人との結びつきが、牧口がこう書いた時代よりも、はるかに広範かつ濃密になっている今日だからこそ、それをすでに当時指摘していた牧口の発想は、一層光り輝いています。

こうした関係の国内版を、牧口は次のように書いています。「備後表の畳に座ったり寝たりし、瀬戸焼の陶磁器で飲食し、九谷や唐津の磁器に、京都製の鉄瓶の湯を注いで煎じた宇治茶の一杯で疲労を慰し、北陸地方の白米を常食するというのが私の今の日常生活云々」⁽¹¹⁾と。

この引用文に関連するので申し添えますと、牧口が『人生地理学』を著した根本的な動機は、地理は教育上重要な教科であるのに、甚だ軽視されている上、断片的な事実を丸暗記させるだけの教育であるために、教育効果があがらないだけでなく、児童生徒が最も嫌う

教科なのを、なんとか教育の仕方を改善して、児童生徒が面白がり、学習成績が向上するものにしようとした、教育改革論の提示なのです。⁽¹²⁾

具体的には、例えば今まで紹介しましたように、「われわれが日常身近に接する物品を、産地と連絡させ、さらにその産物にその原因と結果との知識を連絡させて考えると、単に物産の記憶がやりやすくなるだけではなく、物産に因果の関係をもつ一國地理のわれわれに重要な部分をも、狭い家庭、また郷土において容易に確実かつ面白く学習できるだろう」というものです。そしてこの牧口式地理教育法を採用すると、児童生徒の成績が、飛躍的に向上することが実証されたのです。⁽¹⁴⁾ところが今日でも、地理教育のあり方は、牧口が嘆いたものと大差ありません。牧口式地理学の輝く所以です。

三 軍事的・政治的・経済的競争から 人道的競争の時代へ

三番目に、『人生地理学』が、今までの国際的競争は

軍事的・政治的・経済的競争であつたが、これからは人道的競争の時代になければならないと提唱したことを述べたいと思います。

戦争は、単に人を傷つけ殺すだけでなく、人間的連帯を破壊させ、直接武器で殺傷する上に、人々全体の生活・生命を危機に追いやります。欧米人がこのことを骨身にしみて覚らされたのは、第一次世界大戦でした。戦争はもはや、単に軍人だけがやりあうものではなく、国民総体を巻き込む総力戦になったからです。日本人が覚つたのは、ようやく第二次世界大戦でのことでした。今また忘れかけていますけれども。

ですから、人は連帯してこそ生きていけるのだということを、庶民の生活を具体的かつ詳細に題材にして説いた、牧口の『人生地理学』の戦争反対論は、当時とは勿論のこと、今日にいたる凡百の反戦論を超えているのです。戦争とは総力戦であることがはっきりした、そして局地的紛争でも、非戦闘員がいかに悲惨な状況に巻き込まれるかが、難民問題だけを見てもはっきりした現在でさえ、牧口のような着眼は、他に殆どあり

ません。そして『人生地理学』のこの認識こそが、創価学会の平和思想・平和行動の根源だと私は思います。

今私は、「当時は」と申しました。そうなんです。牧口が『人生地理学』を執筆していた当時は、反戦論が実にかほそいものでした。それどころか、他国を侵略し植民地にする、帝国主義の最盛期でした。最盛期と申しましたのは、単に帝国主義的侵略と支配が盛んであっただけではなく、当時は、帝国主義が正義だったからです。国威を拡張し、植民地をより多く保有することが、先進国であることの資格要件でした。逆に、帝国主義化しなければ、他国から圧迫され侵略されるという観念が支配的で、現実的にもそれが起こりえたのです。言わば、「植民地になりたくなければ、帝国主義国になれ」という状況でした。こうした心情が、当時は愛国心だったのです。

日本でもそうでした。牧口が『人生地理学』を著した時期は、日清戦争（一八九四―九五）の後で、日露戦争（一九〇四―〇五）の前でした。当時の日本国民は、反ロシア感情で血液を沸騰させていました。

というのは、日本が日清戦争で勝利し、いわゆる満洲の遼東半島の租借権やら多額の賠償金やらを、清国つまり中国から獲得したところ、ロシアもまた中国への侵略を企んでいましたから、魂胆を同じくするドイツとフランスを語らって、日清講和条約締結直後に、日本に対して、遼東半島の中国への返還等を迫ったのです。これを拒否すれば、対日武力行使を実施するとの脅迫を添えての勧告でした。当時の日本の軍勢力、さらには国力からすると、日本はこの勧告に屈伏するしかありませんでした。これがいわゆる「三国干渉」です。日本国民は大変な屈辱感を与えられました。ですから、「臥薪嘗胆」が、ほとんど全国民共有のスローガンでした。しかもロシア自身が、その後すぐに満洲への軍事的経済的侵略を開始し、陸海軍の大部隊を駐留させたのです。したがって、屈辱感が混じった日本の反口感情は、沸点に達していました。こうした時に、反帝国主義論を述べることは勿論、思うことでさえ、「非国民」さらには「国賊」扱いでした。

こうした地球規模の時代思潮・時代感情の中で、牧

口はまず、「現在の列国が熱狂する国民的特質の発展を目的とする帝国主義なるものは、国家の目的中の最高、真正なるものであるか否か」と、帝国主義正義論に根底的な疑問を投げかけました。その上で牧口は、「現在の時勢は、国家の目的が人生最終の目的と一致する人道へ向かうべき過程の一つである帝国主義の時代である」と、帝国主義は、所詮乗り越えられるべき中間段階のものでしかなく、しかも「近來の欧州国民の實情に鑑みると、たとえその全部が大いなる国民的利己主義とは言えなくても、少なくともその内には少なからざる利己的欲望が含蓄されていると言うべき」で、「真正に発達し、人生を達観している人々の理想を満足させるものではない」と批判するのです。

さらに牧口は、「欧州人が今や鋭意、自国の勢力拡大に急で、そのため他国の平和を乱すことを顧みず、さらには自国に災いが醸生されつつあることを顧みず、ただただ軍備の拡張のみに熱中しているのだが、それは結局は突然自分の脚下より崩壊がはじまり、大々的な混乱と壊滅の惨状を呈するのではないか」と、帝国

主義的膨張が、侵略の相手だけではなく、侵略を行っている国自身に、大きな災害をもたらす危険性があると指摘します。これは、第一次・第二次世界大戦の結果を予言しています。今から一世紀も前に、このことを鋭く指摘した、牧口の眼力の凄さには驚きます。

その上で牧口は、こうした帝国主義の自他共に対する危険性を、「心ある人々は憂慮せざるをえない。これこそヒューマニティの叫び声が次第に高まりつつある所以ではないか⁽¹⁹⁾」と指摘します。つまり、反帝国主義こそ、人道主義・人間主義なのだと言うのです。しかし当時は、そしてその後の第二次世界大戦終結までは、後進国への帝国主義的侵出は、それらの国々を「文明の恩恵」に浴させる人道的行為であるというのが、先進国、つまり帝国主義国では疑う余地のない常識でした。イラク侵攻という事実を見せつけられると、ひょっとしたらアメリカは、まだこの前時代的常識に支配されているのかもしれない。そして日本にいたっては、今日においてもなお、「日本の朝鮮や満洲やらの支配は、これらの地に文化・文明をもたらした善政だ」と思い、

想の発達している者には認識されているところだから、経済的闘争時代に代わって、次に来たべきものは、人道的競争形式だろうということは、想像に難くない。では人道的競争形式とは何か。従来武力あるいは権力をもってその領土を拡張し、できるだけ多くの人々をその威力の下に服従させ、あるいは外形はそれらとは異なり経済力によって、実は武力もしくは権力をもって行ったことと同様のことを行うものを、無形の勢力でもって自然に薫化するものである。すなわち、威服させるのではなく心服させるのである。利己主義的に領土を拡張し、他国を征服しなくとも、風を望み、徳に懷き、おのずから来たという仁義の方法である。

要はその目的を利己主義にのみ置くのではなく、自己とともに他の生活をも保護し、増進させようとするところにある。言い換えれば、他のためにし、他を益しつつ自己をも益する方法を選ぶのである。共同生活を目的意識的に行う

口にもする人が少なからずおり、しかも、自分の言動に最も慎重であるべき有力政治家に、このことを公言して憚らない人間が絶えません。ですから、こうしたものの考え方を、日露戦争前に批判し否定した、牧口の高さは仰ぎ見るほかないのです。

こうした精神態度の牧口ですから、彼が求めた国際関係とは人道的競争です。『人生地理学』の第二十八章「生存競争地論」において、国と国との間の競争の時代的変遷を、最初は軍事的競争時代、二番目に政治的競争時代、三番目に経済的競争時代とした上で、その最後に人道的競争形式を置きました。これだけを、「時代」とはせず「形式」としたのは、そのような時代がまだ到来していないからです。

牧口は、この人道的競争を次のように説明します。

人道的競争形式は、今日の国際間において見ることはできないけれども、生存競争の場での最終の勝利者が、必ずしも経済的優勝者でないことは、現在においてもすでにある程度以上思

のである。⁽²⁰⁾

これこそが、「共生」の中でも最も理想的な、「共利共生」の宣言なのです。繰り返しますが、帝国主義全盛期に、牧口はこう宣言したのです。これは、当時にあっては誰も空想もできないほどの先見性です。いや、今日においても珠玉の如き精神態度であることは、アフガン戦争・イラク戦争や、各地の紛争・テロ事件を見ても言えることです。

四 人権こそ神聖不可侵

四番目に、『人生地理学』で牧口は、人間の基本的人権は、神聖にして侵すべからざるものと宣言しているということを述べます。

まず牧口は、国家権力の発動機関である政府は、個人の権利自由を侵害する危険性を内在しているものだ、という認識を示した上で、「その自由は神聖侵すべからざるものとしなければならない⁽²¹⁾」と提唱します。つまり、国家権力が個人の自由を絶対に侵さないような仕

組みを、構築しなければならないというわけです。

彼が、その個人の自由とするものは、「良心の自由、思想の自由、言論の自由、宗教の自由、および政治・宗教・教育等の目的のためにする個人結社の認許等」がその主なものです。⁽²³⁾

かつて日本は憲法をもたない国でした。ようやく憲法が施行されたのは、明治二十三年、一八九〇年のことでした。いわゆる旧憲法、つまり大日本帝国憲法です。そして、この大日本帝国憲法は、国民の権利を認めてはいますが、牧口が挙げた自由についてはどう定めているかと言いますと、「日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨害ス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス」(第二十八条)、「日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ言論著作印行集会及結社ノ自由ヲ有ス」(第二十九条)と、ごく部分的である上に、厳しい条件付きで容認しているに過ぎません。

そして、そもそも大日本帝国憲法が神聖不可侵としたものは、天皇なのです。その第三条で、「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」と定めています。

しての郷土」で次のように述べています。

広大な天地の状態は、実は猫の額ほどの一小地で、その大要を顕している。だから世界の地理に現れる複雑な大現象の概略は、ほぼそれを片田舎の一町村において説明することが難しくない。すでに一町村の現象によつて郷土の地理を明らかにしたならば、それによつて世界の地理を理解することは容易である。これが私が、地理学研究の順序として先ず郷土の精細な観察を行い、その結果から広く一般の地理的現象に適用することのできる原理を帰納し、確定しようとする所以である。⁽²⁴⁾

これは先ほど紹介した、牧口の、「人間は連帯してこそ生きていられる」という認識の説明の仕方に、端的に示されています。だから牧口はこうも言うのです。

誰か言う、郷土の観察を卑近にして浅薄なも

こうした時代において牧口が、『人生地理学』で国家権力の加害性と人権の神聖不可侵性を主張したことは、いかに時代を先取りしているかが、ここからも明白です。

日本の国家が牧口の主張に接近したのは、戦後の新憲法、つまり日本国憲法からです。現行の新憲法第十条は、「国民は、すべての基本的人権の享有を妨げられない。この憲法が国民に保障する基本的人権は、侵すことのできない永久の権利として、現在及び将来の国民に与へられる」と明定しています。『人生地理学』の出版の四十四年後。それにしても時間のかかったものです。

五 「郷土」を徹底的に調べれば

「全世界」がわかる

五番目に、「郷土」を徹底的に調べれば、「全世界」がわかるという、『人生地理学』の研究方法論のユニークさについて述べます。

牧口は、『人生地理学』の冒頭部分、「観察の基点と

の、と。故に私は重ねて言う。人間が他日大社に出でて、開かれるであろう知徳の大要は、実に、この小世界に網羅し尽くされている。もし郷土において周囲の事物をよくよく精細に観察するならば、他日大世界を理解する原理は、郷土に確定されている、と。⁽²⁵⁾

『何でも見てやろう』の著者として有名になり、後にユニークな市民運動、「ベ平連」(ベトナムに平和を！市民連合)のリーダーとしても著名になった小田実氏が、「虫瞰」という観方を提示しました。これは、「エライ人」の、大所高所から行う「鳥瞰」という物事の観方に対抗して、地べたを這いずりまわる虫の視角に譬えた、市井の庶民の目線のことであり、なかなか説得的な提言ではあります。

しかし牧口は、虫瞰の大事さを小田氏よりもずっと以前に認識していた上に、そもそもこの、「鳥瞰か虫瞰か」という二元対立的発想そのものを、乗り越えていたのです。それもはるか昔にです。二元対立的発想とは、

何ことも二つに分けて両者を対立させたり、「あれかこれか」の選択を迫るという発想です。昨今でのその典型は、「人間対自然」、「環境か開発か」等の考え方に見られるでしょう。本当は、両者は「二而不二」なのですが。

鳥瞰と虫瞰に戻りますと、これまで述べてきたことから明らかなように、牧口の『人生地理学』によれば、「虫瞰に徹してこそ鳥瞰できるのだ」ということになります。

「個別」と言ってもよい、「部分」と言ってもよい、「地方」と言ってもよい、そうした「小世界」同士が、有機的に関係を取り結び合うことによって、「大世界」を構成するのです。ですから、ある一つの「小世界」の内に、他の「小世界」との無数の関係性がこめられています。そして、この関係性こそが「大世界」なのだ、牧口は理解するのです。

したがって、牧口のように、「私の服は、私の靴は、私の眼鏡は、子供の乳製品は、子供の服は、私が茶を飲むための茶碗は、その茶は」等々と、この関係性を丹念に読み取り、辿っていけば、自ずと「大世界」が

開示されてくるのです。だからこそ牧口は、省略した書き方をせず、あくまでも「私の服はイギリス製」云々、「私の子供のための乳製品はスイス産」云々、「備後表の畳、瀬戸焼の陶磁器、京都製の鉄瓶、宇治の茶」云々と、事実を一つひとつ具体的に、克明に書き進んでいるのです。ですから、「郷土論」が牧口の一生の学問教育の「基点」になることは、方法的に必然のことなのです。

そして、こうした牧口式方法論には、いまだどんな学者も到達していません。

六 柳田國男をはるかに超えた牧口常三郎

牧口は、柳田國男とよく関連付けて評価されます。そこで最後に、牧口と柳田との違いについて述べます。その場合の牧口とは、巨大な全体像ではなく、本日のテーマに即して、『人生地理学』の範囲内に見える牧口です。そう限定してもなお、牧口が柳田を、比較を絶して超えていることが明白になります。

柳田は、「日本民俗学の父」と言われており、「郷土

会」という研究グループの有力メンバーであることからわかるように、郷土研究に熱心な人物です。そして牧口も、この「郷土会」に参加していました。もともと、牧口のいま一つの大著『創価教育学体系』への献言で、新渡戸稲造や柳田が述べているように、中途から、事実上脱会に等しい休会状態に入りました⁽²⁶⁾。

そこで世の中には、この牧口と柳田との面識関係と、「郷土」に関心をもつという共通点を強調して、牧口を評価する人が少なくありません。端的に言う、あの柳田國男ほどの男に認められたのだから、牧口常三郎という人物は偉いのだ」という発想です。

しかし私は、こうした牧口の評価の仕方に大反対です。第一、両者に共通点があったとは思えません。両者の間の深く広い溝のような相違は、当の「郷土」というものの認識の仕方からも、簡単に見いだすことができるのです。

柳田の場合の郷土は、「其實質に於て故郷郷里、乃至は生れ在所といふ言葉と、格別の相異を持つて居ない⁽²⁷⁾」のです。なんと皮相的かつ狭隘な認識でしょう。

牧口は違います。牧口は、「郷土とは何か。その範囲は観る人の立脚点によって異なる⁽²⁸⁾」と、まずは相対化し、その上で一挙に総体化します。「すなわち心身生活の直接影響区域、詳しく言う、その人が定住するところ、歩きまわるところ、目で見るところ、耳で聞るところ、感動するところ、動作するところのことである⁽²⁹⁾」と。

だとすれば、牧口の言う「郷土」とは、結局のところ、生身の人間が現実具体的に、全身全霊を投じて生活している場所総体のことなのです。

私事ですが、柳田式ですと私は郷土を失った人間です。私は「満洲」の大連で生まれ、大連で一度引っ越しをし、次に瀋陽に移ってまた一度引っ越しをし、さらに長春に移り、敗戦でまた大連に移り、それでも一度引っ越しをし、和歌山に引き揚げ、その後大阪に移り、またまたそこでも一度引っ越しをし、そして東京の合計六箇所ですら、次に京都に移り、千葉に移転して、その千葉で三箇所に住みながら勤務地は東京で、その後にドイツのミュンヘンで二度暮らし、横浜でも

住み、そして今は愛媛に住んでいる。しかもその愛媛でも一度引越しをしているという、流転の境涯です。小学校だけでも八つ行きました。一年生のうちに二回も転校しました。中学校は二つ行きました。だから、「出身は？」と尋ねられると困ってしまいます。そして、どこも私なりに生き抜いた懐かしい場所です。全部が私の「郷土」なのです。ですから、牧口式の郷土の概念規定を知って、私はほっとします。

ここで本題に戻りますが、牧口と柳田との「郷土」概念の相違は、ふたりの郷土を研究する目的意識・問題意識の明白な違いと通底します。

牧口の場合は、もう詳しく紹介したので繰り返しません。柳田の場合だけを紹介しますと、彼の郷土研究の第一義は、「手短かに言ふならば平民の過去を知ることである」⁽³⁰⁾。つまり彼の問題意識は、言うなれば「現在」を考古学的に認識することなのです。一般には衰滅した物事が、不思議にまだ残っているという、「生きた化石」の発見こそ、彼の主目的だったのです。そこで彼は山村に関心をもちました。なぜなら、「山に残

定される存在」と書いてありますし、柳田は「大和民族の特性とは、自分は、稲の栽培耕作だと答へたいのであります」⁽³¹⁾と言っていますから。そして、この場合の稲とは明らかに水稲であり、畑、とくに山村の焼畑で栽培される陸稲ではありません。

だから柳田の「常民」からは、業種で言えば畑作や果樹作や、畜産の農民も林業民も漁師も、職人も芸人も商人も、ましてやサラリーマンも、場所で言えば山村民も漁村民も都市民も、全部排除されます。これでは、今日の日本人の大部分が排除されるだけではなく、そもそも「柳田民俗学が『常民』を指定した段階においても、すでに『常民』の実体は消滅化の方向をたどっていたこともあきらかである」⁽³²⁾と、ほかならぬ民俗学者たちが言わざるをえない代物なのです。ましてや柳田が、「我々『常民』の大多数は、この百年間すらもなお文盲だったのである」⁽³³⁾と言うにいたっては、とんだ噴飯物です。少なくとも江戸時代の民衆の識字率、つまり読み書きができる人の割合は大変高かったことは、日本史の常識ですから。

つて居るものは、残つて居る日本であつた」⁽³¹⁾と彼は信じるからです。ですから、牧口の郷土研究の目的意識・問題意識とは、比べものにならないほど狭く小さく、しかも牧口とは正反対に、全く後ろ向きなのです。そうすると、彼の主関心対象は山村民かと言うと、全く違います。「郷土」とともに、柳田民俗学の二大キーワードの一つが「常民」ですが、彼にとつての「常民」とは、世間が思い込んでいるような、平民一般・庶民一般・民衆一般ではありません。結論を先に申しますと、実はどういう人間類型なのか、はつきりしないのです。彼自身が監修した『民俗学辞典』（東京堂出版）を読んでも、明らかにありません。この辞典は、「常民」というものを、「現実とその範囲を規定することとは必ずしも容易ではない」と告白しています。

しいて言えば、平地の自分所有の田圃で稲を栽培している農民のことのようです。『民俗研究ハンドブック』（吉川弘文館）には、「この『常民』の属性を考えると、まず定着農耕民であつたこと。具体的には近世封建社会下の村落にあつて、土地持ちのいわゆる本百姓に比

柳田國男の民俗学とは、こんなレベルのもので。ですから、そもそも牧口を柳田などと比較されてたまるか、というのが私の正直な気持であると申し上げて、本日の話を終わります。

注

- (1) 牧口常三郎『人生地理学5』、聖教文庫、二二八頁
- (2) 同、二二九頁
- (3) 同、二二二頁
- (4) ロバート・P・マッキントッシュ著、大串隆之他訳『生態学 概念と理論の歴史』、思索社、四二頁
- (5) 同、六一―六二頁
- (6) 同、四七三頁
- (7) 同、四七一―四七三頁
- (8) 『三代会長年譜』上巻、創価学会、四〇頁
- (9) 同右、ならびに『人生地理学1』、聖教文庫、一三頁
- (10) 『人生地理学1』、聖教文庫、二四―二五頁
- (11) 『人生地理学5』、聖教文庫、二九九頁
- (12) 同、二八七―二八八頁、ならびに『牧口常三郎全集』第八巻、第三文明社、二二頁
- (13) 『人生地理学5』、聖教文庫、三〇〇頁
- (14) 前掲『牧口常三郎全集』第八巻、二〇―二二頁
- (15) 『人生地理学5』、聖教文庫、二七頁

『人生地理学』の日本地理思想史上における意義

竹内啓一

私は、地理学のなかでも、最近は地理思想史を専攻しています。地理という漢字の組み合わせは、中国の古典に紀元前からありましたが、このふたつの漢字が「チリ」と発音されて日本語になったのは比較的新しく、一七六〇年代の蘭学者によつてのことです。地理学がひとつの学問と考えられるようになったのは、せいぜい幕末の頃で、さらに大学で地理学または歴史地理学という講義がなされるようになったのは、一八八〇年代末になってからのことです。しかし場所や領域、あるいは環境についての考え方、それらをどう認識する

かということは、地理などという言葉がなくても、また西洋で確立したひとつの学問としてそれが輸入される前から、あらゆる文化のもとにあったわけで、それを社会思想史として研究するのが地理思想史なのです。牧口常三郎の地理思想史、とくに地理教育についての考えを検討するためには、彼の『人生地理学』以外の著書、一九一二年の『教授の統合中心としての郷土科研究』、一九一六年の『地理教授の方法及び内容の研究』、さらには一九三〇年以降四巻にわたって刊行された、『創価教育学体系』が検討されなければならないで